サントリーホールのクリスマスに寄せて

恩田 陸

よそゆき。おめかし。そんな言葉が半ば死語になってしまった昨今であるが、劇場という場所には、まだもう少しそんな言葉が残っている。そう、劇場では観客もまた、「観られる」立場であり、劇場のロビーや客席という舞台を構成する登場人物の一人なのだ。

長時間座っているのだから、服はいろいろ考える。セットアップかワンピースか。なるべくストレスのないものを。靴もヒールが高いと、考えている以上に足が疲れるので、低めのもの。意外に盲点なのは、アクセサリーのリング選びだ。私は、ごつめでおおぶりのリングが好きなので、普段はよく着けているが、長時間拍手をすると、指にぶつかってしばしば流血していたりするので、長年の学習の結果、コンサートに行く時は拍手しやすい小ぶりのものを選ぶことにした。バッグも、客席で膝に載せてかさばらないもの、かつ膝で横向きに置いた時に中身が落ちないよう、開口部がしっかり閉まるものにする。

劇場に向かうのは、いつもちょっとした緊張感がある。まず、チケットをきちんと持ったか確認する。封筒とかむきだしの状態ではなく、専用のチケットホルダーに入れて、すぐに取り出せる状態にしておきたい。チケットのもぎりの前であちこち探すのはとても焦るし、後続のお客さんにも迷惑だ。ちゃんと開演時間に間に合うよう、逆算して出発時間を決める。ルートと時間は余裕を持って。タクシーが渋滞につかまり、時計とメーターを交互に見ながらハラハラした

挙句、ギリギリに劇場に飛び込む、というのはどうにかして避けたい。開演したばかりのところで、一人客席でゼエゼエいいつつ汗だくでいるのは、なかなか厳しいものがあり、「間に合った」「危なかった」というのに気をとられて、最初のほうを見逃してしまったりするからだ。

私の場合、少し早めに劇場に着いたら、客席に着く前に、とにもかくにも、まずはホワイエでシャンパンを一杯。日常の時間から、特別な時間に入っていく儀式みたいな感じ。ゆっくりシャンパンの泡と香りを楽しみつつ、コンサートへの期待を高めてから席に着く。

名劇場、名ホールはそこに行くというだけで気分が上がる。このあいだ、大阪のフェスティバルホールに行ったら、皆が入口の赤い絨毯が敷かれた大階段のところで写真を撮っていて、やはり宝塚のある関西では大階段がお約束なのだなあ、と妙なところで感心してしまった。

べらぼうに公演数の多い東京には、良いホールが山とあるが、世界中の音楽家から特に名ホールと名高いのがサントリーホールである。コンサートホールにはシューボックス型（長方形で、いちばん奥に舞台がある）とヴィンヤード（ワインヤード）型（舞台をぐるりと階段状の客席が囲む）の二つがあるが、サントリーホールは典型的なヴィンヤード型で、演奏者との親密な雰囲気が楽しめる。

そんなふうに、ただでさえ特別感のある劇場は、クリスマス・シーズンともなれば、それぞれ飾りつけを競い合い、いっそう華やかな空間になる。

クリスマスというと、いつも子供の頃を思い出す。私はプロテスタント系の教会が運営する幼稚園に通っていたので、毎年クリスマス劇が上演されていたのだ。賛美歌も歌っていたし、クリスマスといえば歌と音楽、と刷り込まれている。

長じて、大学時代はジャズ・バンドのサークルに所属していたので、コンサートを開く費用を稼ぐため、クリスマス・シーズンはダンス・パーティやクリスマス・パーティで演奏していたので、「ホワイト・クリスマス」や「サンタが街にやってきた」などの定番のクリスマス・ソングが頭に浮かぶ。どちらにせよ、やはりクリスマスは音楽！ だ。

素敵なコンサートを楽しんだら、やはりその余韻を反芻したり、分かちあうためにも、ゆっくり食事をしたい。食事での感想戦を済ませたところで、ようやくコンサートが完了する、と言ってもいいくらいだ。かくも、人生を豊かにしてくれるコンサート・ライフ。ぜひ、このクリスマスから、ご一緒に。

（おんだ りく・作家）